

ISSN: 2189-793 X

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

とうしよけんぶんしつ
島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 20

2025年3月

企画紹介	p2-3
奄美分室設置10周年記念	高宮 広土
研究紹介	p4-5
奄美プラム「花螺李」の栽培研究	香西 直子
奄美のコウモリは特別？南西諸島で種分化のなぞに迫る	池田 悠吾
分室活動報告	p6-9
学生島体験！	p10
奄美大島パワー！！	高比良 広樹



奄美分室設置10周年記念

高宮 広土

(前鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

国際島嶼教育研究センター奄美分室が設置10周年を迎えた。2015年4月新設。その数ヶ月前、私は札幌大学に在籍し、彼の地から奄美・沖縄諸島の先史時代について20年以上研究していた。調査で奄美・沖縄へ調査を訪れるたび、地元の方々から「本土の研究者に研究協力しても、彼らはデータを持ち帰り本土で発表するだけ。私達にはほとんどその成果を伝えてくれない」という声をしばしば聞いた。自分なりに地元への情報提供はしてきたつもりではあったが、自分もその一人なのかもしれない、と感じつつ耳を傾けていた。2010年頃から、奄美・沖縄諸島の先史時代は世界的にも大変貴重で、稀代な情報があることがみえはじめ、その「貴重・稀代」な情報を地元の方々へお伝えしたいという気持ちがぐんぐん高まっていた。そして2014年、島嶼研で専任教員(社会科学分野)の公募があった。応募条件には「奄美市名瀬に6ヶ月滞在し、研究・教育を実施する」とあった。この条件をみて、即座に応募を決意し、半年かけて必要書類を作成し島嶼研に提出した。運よく(?)採用され、2015年4月から奄美市で生活を開始することとなった。その奄美分室は一体何をやるどころなのだろう。

奄美分室の役割・目的は多岐にわたるが、ここでは着任前から最重要課題としてきた「地元への研究成果の還元」について、この10年実施してきたことを紹介したい。着任時、私は「10年やってその後がようやく第一歩」と考えた。つまり、2015年からの10年間は第一歩ではなく、土台づくり期間と捉えていた。ではこの10年でどのような土台が出来上がったのだろうか。「地元への研究成果の

還元」活動は、次のように大別できる。1) 聴講型、2) 体験型、3) 文献型および4) 研究型。それぞれについて述べていこう。

- 1) 聴講型：最新の研究成果を聴講する機会の提供する取り組み。



1) 聴講型：分室で語りましょうの様子

その手段として、

- a) 奄美分室で語りましょう：研究者が奄美分室で、研究成果を発表。
- b) 島嶼研シンポジウム：奄美群島を会場とするシンポジウムを開始。
- c) 島めぐり講演会：奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良島および与論島へ研究者が赴き、それぞれの専門テーマについての講演を実施。
- d) 島嶼研研究会中継：島嶼研で行われる月例の研究会を奄美分室でライブ中継。
- e) 奄美テレビとの協働：研究ビデオの作成し、YouTubeで公開。
- f) 奄美FM出演：研究内容を地元ラジオで紹介。

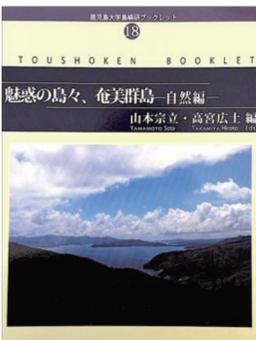
- 2) 体験型：観察などを通して、奄美の自然や文化を学習する取り組み。



2) 体験型：植物観察会の様子

その手段として、

- a) 植物観察会：奄美群島の多様な植物を観察して理解を深める。
 - b) 海の観察会：奄美の海の生物を観察して理解を深める。
 - c) おしごとテーマパーク、学び・福祉フェスタ：奄美市主催のイベントで研究の醍醐味を体験。
- 3) 文献型：書籍や記事を通して研究成果を伝える取り組み。



- 3) 文献型：島嶼研ブックレット（左）と島嶼研分室だより（左）

- a) 島嶼研ブックレット：高校生でも理解できる内容で研究を解説した書物。
- b) 島嶼研分室だより：奄美分室の最新の研究活動などの紹介。

- c) 地元紙掲載：奄美新聞、南海日日新聞に研究内容を掲載。
- 4) 研究型：地元の研究者や地元住民が、自身の興味のある分野を積極的に研究する。奄美群島には研究熱心な方が沢山存在し、多くの方は独学で研究を深めているが、鹿児島大学や他地域の研究者などから情報を収集して、自身の研究をさらに深化させる。

この10年間で「地元への研究成果の還元」を目的に様々な土台づくりを進めてきた。しかし、冒頭に述べたように、これらはあくまで土台である。この土台をさらに強固にし、次の10年で一歩でも前進できることを願う。



分室設立当初：奄美市水道課の一面に拠点を構えた頃

薩南諸島における研究の紹介①

奄美プラム「花螺李^{からり}」の栽培研究

香西 直子（鹿児島大学農学部農学科植物資源科学プログラム）

奄美プラム「花螺李（からり）」をご存知ですか？奄美大島で栽培されている珍しいスモモです（写真1）。



(1) 奄美プラム「花螺李」の果実

「花螺李」の開花期は2月中旬頃で、可愛らしい白い花を咲かせます(写真2)。



(2) 「花螺李」の花

通常のスモモに比べてずいぶん早く開花します。一般的なスモモは、開花するためには一定の低温を経験する必要がありますが、「花螺李」の場合、寒さの要求量が極めて少ないためです。そのため、「花螺李」は他のスモモにはない特徴を持つ、奄美大島にしかない極めて貴重な地域資源であると言えます。暖かい気候を好む「花螺李」ですが、一方で、暖冬の年には開花数が少なかったという報告もあり、全く低温を必要としない

わけでもなさそうです。近年進行している暖冬は、「花螺李」の栽培にも影響すると考えられます。しかし、「花螺李」を栽培するには一体どのくらいの寒さが必要なのかという具体的なことはまだ分かっていません。他のスモモや果樹類も今後、温暖化の問題に直面することが予測され、「花螺李」の生育生理に関する情報は、温暖化対策にも活用できると考えられます。このように有用な地域資源でもある「花螺李」ですが、近年、高齢化によってその栽培面積は減少傾向にあります。「花螺李」の果実は一般的なスモモに比べて小ぶりですが、爽やかな甘酸っぱさが特徴で、色が濃く豊富なアントシアニンを含みます。このような「花螺李」の魅力についても、もっと多くの人に知ってもらいたいと思います。大和村に繋がる尾神山トンネルにはスモモの絵が描かれており(写真3)、地域の特産果樹として愛されていることを実感します。大和村方面に足を運ぶ機会があれば、ぜひトンネルの絵にも注目してみてください。



(3) 尾神山トンネルに描かれたスモモ

薩南諸島における研究の紹介②

奄美のコウモリは特別？南西諸島で種分化のなぞに迫る

池田 悠吾（東京大学農学生命科学研究科）

奄美諸島には、アマミノクロウサギやアマミトゲネズミ、ケナガネズミなど、本土にはいないユニークな哺乳類が多く生息しています。では、同じ哺乳類であるコウモリの場合はどうでしょうか？興味深いことに、奄美諸島のコウモリには、本土にいない種と本土にもいる種が共存しています。例えば、リュウキュウユビナガコウモリは、本土に生息するユビナガコウモリとは異なる南西諸島の固有種です(図1)。一方、



(1) 大島で捕獲したリュウキュウユビナガコウモリ

モモジロコウモリは、奄美諸島だけでなく本土にも広く生息しています。同じコウモリでも、なぜ一部の種は独自に進化し、ある種は本土と共通するのでしょうか？

交配できる生物の集まりである集団が、何らかの理由で分断され、交配が長い時間できなくなると、それぞれの集団が異なる種へと変わっていきます。この過程を「種分化」といいます。種分化が起こる理由はいくつかありますが、奄美諸島と本土の間で生じる種分化の主な理由は、海峡による地理的隔離だと考えられています。

奄美固有の哺乳類は昔、奄美諸島と本土、あるいは大陸とが地続きだった時代に移動してきた後、海で隔てられた結果、集団間の交流が妨げられたことで、奄美独自の種に進化したと考えられています。一方、コウモリは他の哺乳類とは異なり空を飛ぶことができますので、ある程度の海峡を超えて移動することができます。この飛翔能力こそが、奄美にユニークな種と本土と共通する種の両方が存在する理由ではないかと考えています。

コウモリの飛翔能力は、「翼手」と呼ばれる水かきのような手の大きさや形状により決まります。細長い翼手を持つコウモリは長距離飛行が得意ですが、短くて幅広な翼手を持つコウモリは減速や急旋回を含む複雑な飛行を得意とします。



(2) コウモリの翼手(左)とトリの翼(右) コウモリは水かき状の翼手で空を飛ぶ

そこで、私たちは奄美諸島と本土のコウモリの間で、翼手の形状がどのように異なるのかを研究しています。翼手の形状は、自然の中でコウモリたちがどのような行動をとっているのか読み取る大きなヒント与えてくれます。奄美のユニークなコウモリたちはどのような原理で誕生したのか、そのなぞに彼らの翼手の形状から迫りたいと考えています。

奄美分室の活動報告（2024年9月～2025年3月）

<シンポジウム>

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室設置 10 周年記念「地域貢献を地域で考える」

日時：2025年2月15日（土）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

後援：奄美市、奄美群島広域事務組合、鹿児島県大島支庁、奄美市教育委員会、あまみエフェム、鹿児島大学ミッション実現戦略分「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」

司会：山本 宗立（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

基調講演

「奇跡の島々の先史学」高宮 広土（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

講演

「若手研究員からみた奄美分室の役割と研究成果報告—奄美でのコウモリ研究—」

牧 貴大（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

「奄美大島でのバナナ調査—奄美分室を活用して—」

佐藤 靖明（長崎大学多文化社会学部／鹿児島大学国際島嶼教育研究センター令和5年度客員研究員 [タイプI]）

「離島へき地医療実習による体験を通じた学生の学び—地域のつながりの大切さ—」

網谷 真理恵（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）



高宮 広土教授



牧 貴大博士



佐藤 靖明准教授



網谷 真理恵准教授

パネルディスカッション：

登壇者（敬称略）：安田 壮平（奄美市長）、松藤 啓介（鹿児島県大島支庁長）、池田 忠徳（奄美群島広域事務組合事務局長／鹿児島大学国際島嶼教育研究センター令和6年度客員研究員 [タイプII]）、平城 達哉（奄美市立奄美博物館）、岩井 久（鹿児島大学理事 [企画・社会連携担当]）、山本 雅史（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター長）、講演者4名（高宮 広土、牧 貴大、佐藤 靖明、網谷 真理恵）



パネルディスカッションの様子

<セミナー・観察会等>

◎第 49 回奄美分室で語りましょう

「Study nature, not books !—野外に生息するサンゴから見えてくるもの—」

日時：2024 年 12 月 20 日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：北之坊 誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

講演では、奄美群島に生息するサンゴについてフィールド観察に基づく具体例を交えながら、わかりやすく解説された。さらに、地域における今後の研究計画についても共有され、参加者同士で活発な意見交換が行われた。



第49回奄美分室で語りましょうの様子

◎第 50 回奄美分室で語りましょう

「薩摩侵攻以降の奄美の食の変換」

日時：2025 年 1 月 31 日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：泉 和子（令和 5 年度鹿児島大学国際島嶼教育研究センター客員研究員）

本講演では、琉球王国支配、薩摩藩による直接支配、戦後の米軍統治といった複雑な歴史を背景に、奄美群島の食文化がどのように形成・変容してきたかが語られた。琉球や鹿児島の影響を受けながらも、独自性を保ち続けた奄美の食文化は、地域の歴史そのものを映し出すものといえる。後半では、実際に奄美の食材を利用した料理が振る舞われ、参加者がその味を楽しみながら交流を深める場となった。



講演する泉 和子氏

◎第 51 回奄美分室で語りましょう

「コウモリの手のひみつ ークローズアップ翼手—」

日時：2024 年 3 月 7 日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：池田 悠吾（東京大学農学生命科学研究科）

本講演では、コウモリ特有の「翼手」について、鳥とは異なる独自の構造と機能が詳しく紹介された。写真や映像を用いた分かりやすい説明により、コウモリの飛行能力や生態に対する理解が深まった。また、奄美群島を舞台としたコウモリの多様性研究の重要性も強調され、特に奄美群島で独自に進化したと考えられるコウモリの存在が参加者の興味を引きつけた。



講演する池田 悠吾博士

◎第 25 回 鹿児島大学 奄美群島 島めぐり講演会 —奄美の宝、在来カンキツ—

日時：2024 年 11 月 23 日（土）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

後援：奄美市、奄美群島広域事務組合

講師：山本 雅史（鹿児島大学農学部、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

◎奄美分室で協力したイベント

- 日時：2024年10月6日（日）
ワークショップ「モニタリング調査に参加しませんか？」湯湾集落の外来植物マップを作ってみよう
主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
共催：環境省奄美群島国立公園管理事務所
後援：宇検村、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：中島 慶次（鹿児島大学環境学）鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、鶴川 信（鹿児島大学農学部農学科環境共生科学プログラム）
- 日時：2024年10月19日（土）
ワークショップ「モニタリング調査に参加しませんか？」宇宿漁港周辺の外来植物マップを作ってみよう
主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
共催：環境省奄美群島国立公園管理事務所
後援：奄美市、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：中島 慶次（鹿児島大学環境学）、鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、鶴川 信（鹿児島大学農学部農学科環境共生科学プログラム）
- 日時：2024年10月20日（日）
ワークショップ「モニタリング調査に参加しませんか？」思勝集落の外来植物マップを作ってみよう
主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
共催：環境省奄美群島国立公園管理事務所
後援：大和村、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：中島 慶次（鹿児島大学環境学）、鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、鶴川 信（鹿児島大学農学部農学科環境共生科学プログラム）
- 日時：2025年2月16日（日）
モニタリングワークショップ「外来植物モニタリング調査報告会」
主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
共催：環境省奄美群島国立公園管理事務所
後援：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター、鹿児島大学総合研究博物館、奄美市、宇検村、大和村
講師：中島 慶次（鹿児島大学環境学）、田金 秀一郎（鹿児島大学総合研究博物館）、坂元 小梅（鹿児島大学農学部）鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）
- 日時：2024年10月5日（土）、10月26日（土）、10月27日（日）、
2025年1月6日（月）、2月15日（土）、3月22日（土）
次世代科学技術人材育成プロジェクト かごしま未来創造Lab-「本物（ホンモノ）」に触れ、「本物（リアル）」を創る-」
主催：鹿児島大学
- 日時：2025年3月1日（土）
地域経営研究センター シンポジウム2025『鹿児島地域研究のフロンティア』
“人口減少下における価値を生み出す地域創造”
主催：鹿児島大学大学院人文社会科学研究所 地域経営研究センター
後援：国際島嶼教育研究センター 奄美群島広域事務組合

<奄美分室来訪者数>

のべ250名（2024年10月1日～2025年2月28日）

<奄美分室関連報道記事（2024年9月～2025年3月）>

2024/10/7	奄美新聞 P8	『植物調査の方法学ぶ』
2024/10/12	奄美新聞 P9	『学術研究や人材育成講演』
2024/10/12	南海日日新聞 P1	『「産官学金」で未来語る』
2024/10/13	南海日日新聞 P9	『「人材育成と教育」テーマに講演』
2024/11/24	奄美新聞 P9	『在来かんきつ研究説明』
2024/11/25	南海日日新聞 P9	『在来かんきつ魅力発信を』
2024/11/30	南海日日新聞 P1	『回復へ科学的資源管理を』
2024/12/20	南海日日新聞 P4	『奄美と文化人類学④』
2024/12/27	南海日日新聞 P8	『ビル8階にケナガネズミ』
2025/1/18	奄美新聞 P5	『うがみんしょうらん！島嶼研奄美分室』
2025/1/22	南海日日新聞 P8	『生活者視点の研究を』
2025/2/2	南海日日新聞 P9	『奄美と鹿児島「食」の比較』
2025/2/7	奄美新聞 P5	『うがみんしょうらん！島嶼研奄美分室』
2025/2/16	奄美新聞 P9	『研究や地域還元、着実に成果』
2025/2/16	南海日日新聞 P1	『鹿大島嶼研、分室開設10周年』
2025/2/21	奄美新聞 P1	『奄美春秋』

～学生島体験！ vol.20～ 「奄美大島パワー!!」

高比良 広樹（鹿児島大学農林水産学研究科修士2年）

私が所属している魚類生態学研究室では、毎年2回（5月と11月）に奄美大島の河川においてリュウキュウアユの個体数調査を行っている。ウェットスーツ、水中ゴーグルを装備して川を下りながら個体数をカウントし、生息状況を記録することで保全活動に役立っている。そんな調査も、今年度で卒業する私にとっては前回は最後となった。本誌の執筆を機に、これまでの調査を振り返りたいと思う。初めて調査に参加したのは3年前にも遡るが、それまでリュウキュウアユは写真でしか見たことがなかった。調査が始まり、ゴーグル越しに川の中を覗くと、そこには数え切れないほどのハゼやテナガエビが暮らしており、時には大木のようなオオウナギが横切った。そんな光景に圧倒されながら川を下っていくと、本命であるリュウキュウアユを見つけた。激流の中を力強く泳ぐ姿に感動したことを、今でも鮮明に覚えている。冷たい川の水で震えたり、ヘビやイノシシに遭遇したりと、時折過酷な調査だが、調査後のBBQは格別であった。住用の名士、寿さんが用意して下さった肉や野菜を焼きながら、調査メンバーで酒を酌み交わす時間は私にとってかけがえのない思い出である。奄美の開放的な空気にあてられているのか、普段より大はしゃぎしている学生や先生を見て笑いが絶えない時間だった。また、研究室外のメンバーとも交流が深まる良い機会であったため、調査の時は毎回このBBQを楽しみにしていた。調査を通じて、奄美大島が大自然のパワーに満ちあふれた魅力的な島であることに気づくことができ本当に良かったと思う。海や川の透き通った水の中には様々な種類の魚が悠々と泳ぎ、広大な森からは野鳥の鳴き声、車を走らせればヤギやウサギが姿を見せることもある。固有種も多く存在する奄美大島の大自然を守りたいと思うと同時に、奄美大島に住む人々、訪れる人々が、同じ思いを持ってくれることを切に願っている。



調査後の乾杯！

お知らせ

2024年12月事務補佐として若師美香子さんが加わりました。2025年3月本センターの特任研究員の牧 貴大が任期満了により、退職いたしました。

編集後期

奄美分室設置 10 周年を迎え、多くの方々のご協力と情熱に支えられてきました。これからも地域と共に歩み、さらなる発展を目指します。 北之坊 誠也

Facebook Instagram X(Twitter)



島嶼研分室だより No. 20

令和7年3月31日発行

鹿児島大学

国際島嶼教育研究センター奄美分室

〒894-0026

鹿児島県奄美市名瀬港町15-1

奄美群島大島紬会館6階

TEL:0997-69-4852 FAX:0997-69-4853

E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp

http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/

表紙写真：奄美分室から望む朝焼け

(撮影：2024年7月、北之坊 誠也)

ISSN: 2189-793X